

【第二十八回】「仮名の基礎・基本とその書き方」

— 応用古筆 その一 「針切」③ —

巢鴨中学校・高等学校教諭
本誌編集委員

熊坂 尚史

◇はじめに

前回は応用古筆「針切」の三〜六文字の連綿を「関戸本古今和歌集」と比較しながら鑑賞しました。今回はもう少し広い視野で、行の絡み方や構成に目を向けてみましょう。

■源重之の子の僧の集より

「わか(可)くさに(尔)」

ふるさとの花のさかり、ものへまかり／はべる人に／わかくさにこまひきとめてふるさとの花の／さかりをみてもゆかなむ

「源重之の子の僧の集」は詞書きがあるのが特徴です。歌の書き出しより約三字分低い位置から書かれています。前頁からの続きだからでしょうか、少なめの墨量で慎重に書き出して、詞書きの終わりでは極限の渴筆になっています。

歌の先頭である「わ」は、墨をたっぷりつけた上で、ポテッとしなないように穂先だけ少し墨を落としたのでしょうか。繊細に尖った起筆になっていて、続く「可くさ」の方がポリウムのある表現になっているのが、詞書きの渴筆とよく響き合って効果的に感じます。

多字数を連綿すると、自然と右下に流れていくものですが、「の」や「ゆ」は流れを左に戻す働きをしていることが分かります。また「一万」のように、連綿の切れ目で左に戻すこともあります。最後の「無」の取筆の払い上げは、何とも言えない格好良さです。

■相模集より「あふ(婦)ことの」

あふことのかたきとみゆるひとはなほむかし
／のあだとおもほゆるかな

「相模集」は詞書き無しで、歌を二行書きするスタイルです。まっすぐに書かれているページもあるのですが、図のように右下に流している箇所を選んでみました。字幅のある字と細長い字を巧みに組み合わせ、川の流れのような変化を作っています。

「こ」「と」「る」や、変体仮名の「可」は古筆では小さく書かれる字ですが、それに「支」を加えて縦への流れを強調しています。横への広がりや複雑さは「婦」「本」「於」「那」などの変体仮名が作り出しています。さらに、「みゆ

る」や「於も本ゆる」は絶妙な揺れ感を醸して
います。

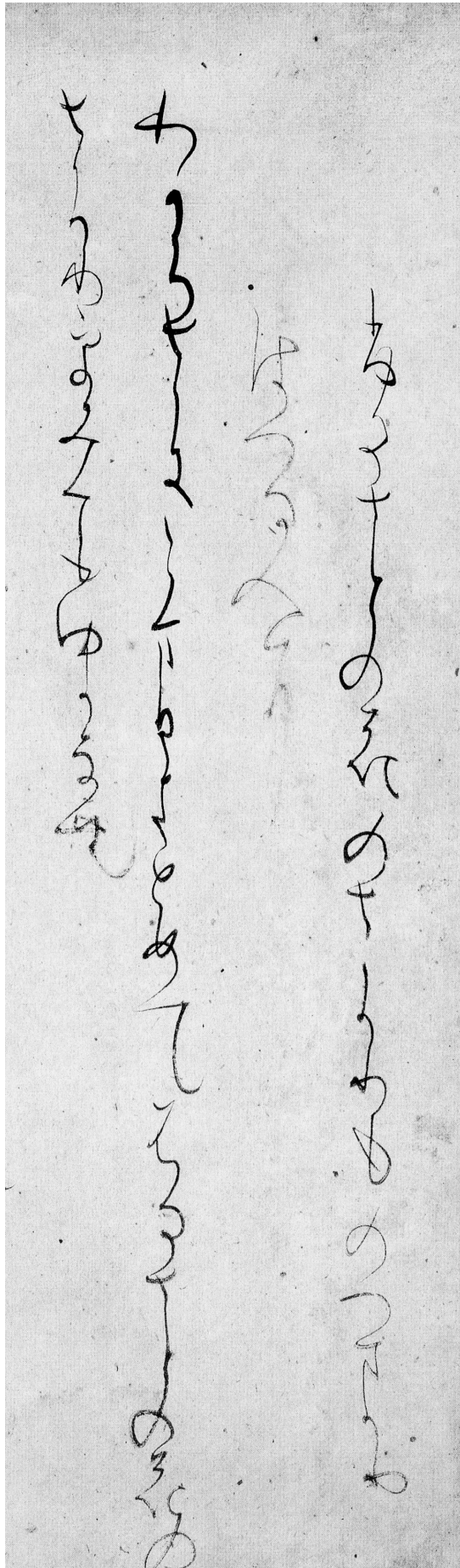
字間にも注目してみましょう。一行目の行頭

「あ婦」と二行目の行頭「のあ」を比較してみ

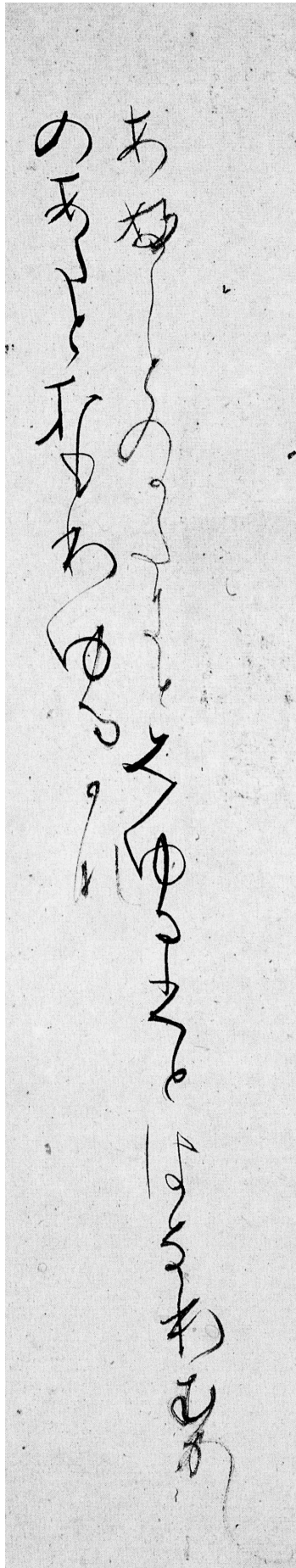
ると一目瞭然ですが、離す箇所と詰める箇所が
かなりはつきりしていて、リズムの変化が楽し
めます。一行目の行脚の「むかし」などは、緊

張から弛緩しかんのカタルシスとでも言えましようか。

中央部の「み」と「る」の関係はまるでサーカ
スの空中ブランコを見るようです。



布るさとの花のさ可利、ものへ万可利／はへる人耳／わ可くさる二万日支とめて不るさとの花の／さ可利乎みてもゆ可奈無（「源重之の子の僧の集」より）



あ婦ことの可多支とみゆる悲とは奈本むかし／のあ多と於も本ゆる可那（「相模集」より）

■四行書に挑戦!

これまで三回にわたって「針切」を鑑賞してきましたが、最後に「針切」風の四行書に挑戦してみましよう。

四行書は和歌一首を半紙の中に四行(三行+数文字)を行書きして、第一句・第三句・第五句の出だしの文字で墨付けをする仮名学習の基本です。過去に「高野切第三種」風、「高野切第一種」風、「関戸本古今和歌集」風、「本阿弥

切古今和歌集」風を書いてみましたが、今回は応用古筆というところで上手く行きますかどうか……。

まずは撰歌です。前回紹介した「あ支者支の花」を使ってみようと思ひ、古今和歌集に当たって、見つけたのが次の歌です。

「秋萩の花咲きにけり高砂の
尾上の鹿は今や鳴くらむ」

(古今和歌集) 第四卷 秋歌上 藤原敏行)
(歌意) 秋萩の花が咲いた。高砂の峰に住む鹿

は今ごろ鳴いているであろうか。

(小町谷照彦訳)

さて、今回も集字です。法帖をめぐりながら、使えそうなものを拾っていきます。書き出しの「あ支者支の花」をとりあえず貼って、続く字をできれば二文字以上の連綿で探していきます。「さ支」「介利」「のし」「可は」「奈く」「ら無」などは比較的簡単に見つけることができました。その他は単体をつなげて並べてみます。

最初は選んだ字をそのまま並べてみるのですが、四行にしてみるといろいろ不都合が出てきます。例えば、一行目に「あきはきはなさきに」と「き」が三回出てくるのをすべて「支」にすると単調になってしまうようなことです。

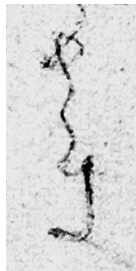
そこで、文字の入れ替えを行います。針切で使われている「き」は、ひらがなの「き」、変体仮名の「支」と「木」です。今回は、ひとつを「木」にしてみました。また、高砂の「た」は「多」か「堂」か迷いましたが、両隣りの字幅が狭かったので「堂」を選びました。

他にも、「の」が四回出てくるのをどうするか……、「さ」の二回はどうするか……(撰歌が失敗だったか……) などなど。試行錯誤しながらなんとか書き上げました。結果の評価は読者の皆様におまかせします。

【一行目】



あ支者支の花(※2つ目の「支」は左下に示した「木」に入れ替える)

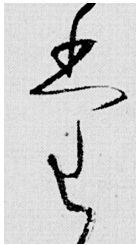


さ支

【二行目】



介利



堂

【三行目】



のし



可は



奈く

【四行目】



ら無



木

(針切風四行書の例) あ支者木の花さ支二ノ介利堂可さこのお能へノのし可はい末や奈くノら無

